
Aster

綾里 美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A s t e r

【Nコード】

N 2 5 0 2 Z

【作者名】

綾里 美琴

【あらすじ】

マンホールから落ちたらそこは異世界でした。夢なら今すぐ覚めてください。帰る方法は神様の感情を取り戻す事？ 無茶すぎませんか。——平凡代表少年と、恐ろしく綺麗な女の子（ただし無表情）の二人が一緒に過ごした日々。＊サイトからの転載、全四話

いち

自分の人生なんて、至って平凡なものだと思う。

ただ毎日なんとなく流されるように生きて、友達と馬鹿やって笑い合って、時々是将来について真剣に悩んでみたりもして。そうして落ち込んだりもするけど、時間さえ経てばまた笑う。特別生きることに執着してるわけでもなく、焦ってるわけでもない。それを虚しいと感じたりはしなかったし、充分幸せだった。平凡の何が悪いっていうんだ、変化が訪れないってのは恵まれてる証拠じゃないか。そんな日々がこれから先も続くのだと、何の根拠もなしに信じてたんだ。

まさか変わる時が来るなんて知りもせず、いつも通り友達と別れて。その「いつも通り」を後悔する羽目になるなんて、一体誰が予想出来ただろう。

「ここは、どこなんだろうか……」

もう見慣れた曲がり角で、友達と別れる。友達は右へ、俺は左へ。家に帰ってから宿題終わんねえよ、なんて阿呆なことをメールし合って、本当に終わらなかつたら次の日必死に頼んで写させてもらったり、その代わりにジュース奢ったり。そのせいで財布事情が厳しくなる時もあったけど、そんな時はうまい棒だとか安いものに変えてくれた。それが、俺の日常。今日だってそう大差はなかったはずだ。それなのにどうして辿り着くのが家じゃないのか、さっぱり分からない。

「どこなんだ、ここ……っ！ー」

いくら叫んだところで、この広い空間ではどこにも届かず消えていくだけだった。

「思い出せ、俺は家に帰ろうとしてたよな……？ で、工事中だったから仕方なく回り道しようとして、マンホールに落ちて……」
「よくそれで無事だったよな俺。いやいやそういうんじゃない、何で落ちた先がこんな奇想天外な場所なんだ？」

誰かが聞いていればただ寒いだけの一人突っ込みをして、ぐるりと周囲を見渡す。……森。の一言に尽きる。何このカオス。夢か？
夢なのか？ そう思っ、頬をつねるのは既にやった。それも二回も。もちろん、痛かった。

誰か、こんな俺に突っ込んでくれないかな。馬鹿じゃないのか、って笑い飛ばしてくれた方がいい。そうしたら俺は一人じゃないんだって安心出来るから。混乱する頭が生み出すのはそんな思考ばかりで、正解になんかこれっぽっちも近づかない。そのとき、俺は一つ
の存在を思い出した。

「あ、そうだ、携帯……！！」

即座に人と繋がれる、素晴らしいものがあるじゃないか！ ナイス、俺！ でももう少し早く気付いてほしかった！

一分一秒でも惜しいと、慌ててポケットから取り出して画面を開く。これできっと、大丈夫だ。

「……………真っ黒……………？」

機種が真っ黒なわけではなくて。いや、真っ黒なんだけど。

間違いなく昨日充電して、満タンにしてあったはずの携帯はうんと
もすんとも言わない。おっかしーな、まさか壊れた？ まだそん

なに使っていないはずなのに、使い方が荒かったんだろうか。

修学旅行の時に友達とノリで買ったストラップが一本つけられただけの、シンプルな携帯。重厚感のあるブラックが気に入って購入したものだ。指紋が付きやすいのだけが難点だけど。クラスの女子とかは見るからに重そうで痛そうなデコレーションをしてたりしたけど、あれ使いにくいんじゃないだろうか。ストラップとは言いにくい大きさのぬいぐるみとか——携帯がメインなのかストラップがメインなのか疑いたくなる——女子の携帯ってすごいよなあ。なんて今考えてもどうしようもない話だ。とりあえず、ここはあの場所じゃないんだから。

気付けばまた脱線してる自分の思考を、一生懸命元に戻す。現実逃避したってどうにもならない。携帯が使えるようになるわけでもない。そのくらいは俺だってわかってた。……だってもう一回つねったほっぺ、やっぱり痛かったし。

「とりあえず、誰か探そう……。きっと帰り方、知ってるはず。うん」

そう自分に言い聞かせて、一步を踏み出す。俺だって本当は今にも泣き出しそうなくらい怖かったけど、ここで何もしないでいたらそれこそ帰れないんじゃないかという恐ろしさの方が勝った。だって、何も知らない地というのは恐怖の対象でしかない。修学旅行で一人だけ迷ったときとか、こんな気持ちなんだろうか。とてつもなく心細くて、次から次へと不安が湧いてきて、一緒にいた友達のありがたみを再確認してみたりして。ああ、無事帰れたらアイツらに連絡取ろう。

大丈夫。誰かに会えたらこんな世界は終わる。光のない、こんな世界は。

「……大体なんで、マンホールから落ちた先が薄暗い森なんだよ。おかしいだろ、普通におかしいだろ」

自分を慰める意味も含めて、ぶつぶつ文句を言いながら探索する。森、更に言えばジャングル。サファリパーク。木や花は好き勝手に至るところから生えてるし、動物は自由気ままに生活してるみたいだった。

全体的に暗い感じで、灯りも太陽の光もここにはない。見渡す限り同じような景色が続いてて、結構歩いたはずなのに変わる気配すら見せない。建物なんて、一度も見なかった。……もしや俺、入り込んでいけな場所に入り込んでたり？ 確か迷ったときって、その場所に留まっていなきゃいけないんだよね！？ でもそれって誰か助けてくれる人がいる場合だよなあ。……だめだ、考えててまた泣きそうになってきた。

俺はずっと都会に住んでて、周りにはほとんど緑なんてなかった。小さい頃よく遊んだ公園もぽつん、とあるだけで、玩具だってほとんどなかったくらいだ。

空に届きそうなまでに高いビル、とてもじゃないけど綺麗とは言えない空気に水。それが、今まで生活していた場所だったのに。

「……誰か、来た」

「ここに、ですか？」

「他にどこがある」

「それはそうですが……まさか、人間ですか」

「まだ分からぬ」

・
・
・

「つーかここは日本、なんだろうか……。まずい、それすら怪しくなってきた。何これファンタジー？　そもそも地球上に存在する場所なんだろうか」

道の真ん中を歩く俺（だつて端っこつてなんか出てきそうで怖かったんだ）を木の陰からちらちら見る、動物たち。最初は猫かー、猫かわいいよなあ、なんてのんきに考えてたけど、よく考えてみれば何でこんなところに猫がいるんだ。それも、猫なのに猫じゃない。猫って翼生えたりするっけ……。いや、ありえないよな……。

鳥は羽が六枚あったり、明らかにサイズがでかかったり、牙が凄かったり、ゲームの世界を連想してしまうのは、俺が一時期モンハンにはまってたせいではない、と思う。となるともしかして、スライムとかもいたりするんだろうか。あのなんとも言えない見た目が好きだったから、いるならちよつと見てみたいかも。青のスライム、赤のスライム、緑のスライム……。楽しそうだな、と考えて、そういえばここには色がないんだと気付いた。何で全部モノクロ調なんだ、気が滅入るじゃないか。

一体どれだけの時間、どれだけの距離を歩いたんだろう。進んでも進んでも変わらない景色に、いい加減俺も挫けそうだった。どうしたらいいのかという絶望がわずかに残る希望を打ち砕こうとしていたとき、ようやく今まで見ることのなかったものが視界に入った。

建物だ！　大喜びした俺は、最後の気力を振り絞って駆け出す。

けどそれが何なのかはつきり分かると、思わず足を止めてしまった。

「……神社？　だよ、な。たぶん」

神社——偉人・義士などの霊を神として祀った場所、だっけかな。昔辞書をばらばらとめくつてるときに、そう書いてたような記憶がある。携帯さえ使えればすぐに調べただけだ。でも何で、フ

アンタジー世界にあるのが神社なんだろう。流れるに神殿とかじゃないんだろうか。ドラクエの転職だって神殿でやってたしさ。確かに、色がないと思ってた。色が欲しいと思ってた。けどこの場所にだけ存在する鮮やかな赤や他の色はあまりにも異様で、周りの景色からもひどく浮いているように見える。それなのに何故か、完成された一枚の構図のような、そんな感覚を覚えた。

それ以上近付くな。

ふと、誰かの声が聞こえた気がした。慌てて辺りを見渡すけど、どこにも人の影すらない。な、なんだったんだろ今の。もし俺の幻聴じゃないなら相手には申し訳ないけど、その忠告は聞けない。誰でもいいから会いたいんだ。会って話がしたいんだ。一人じゃないんだって、安心させてほしかったんだ。

だから聞こえなかったフリをして、神社へと全力疾走する。近づけば近づくほど威圧感のようなものが肌に突き刺さったけど、息が切れて苦しかったけど、俺は必死だった。わらにもすがる思い、ってのはきつとこついうことを言っただろう。一人は、もういやだった。

「……あの、すみません。どなたかいらつしやいませんか？」

ようやく辿り着いた俺は、数段ある階段を上り、息を整えながらふすまに手をかけ——ようとしたら、勝手に開いた。

「何用じゃ」

ぞっとするくらい、無機質な声だった。思いがけず返ってきた言葉に、俺は息を呑む。

綺麗に切り揃えられた肩より短い漆黒の髪、日本特有の美しい着物。まるで人形がそのまま動いているかのような、整いすぎた顔立ち。人が持つはずの温かみが全く感じられない、冷え切った表情が恐ろしくて無意識のうちに一步後ずさってしまふ。そんな俺を見ても、相手は視線を逸らさない。唯一色を持つ紫の瞳は、俺を捉えたままだ。

「何用だと聞いている」

彼方に飛びそうになっていた俺の意識を引き戻すのは、さつきと同じ声。そこにいたのは、俺と年もそう変わらないだろう女の子だった。

「えっと、あの、すみません。俺、迷子になつたみたいで……あの、ここってどこなんでしょうか」

「裏」

「へ？」

今、この子は何を言った？ 裏？ 裏つてなんの？ じゃあ表はいずこ？ そもそもこの子は何者？ そんな風に、俺の頭の中では疑問ばかりが飛び交う。よし、もう一回尋ねよう。俺がそう決意したとき、自分と彼女以外の第三者の声が先に響いた。

「先程からおぬしは誰に口を利いていると思つておる！ 人間風情が恐れ多いと知れ！」

「す、すみません！ ん、あれ、誰の声……？」

別に悪いことしてないのに反射的に謝つてしまふのは日本人の性だよな。悲しいかな、ノーと言えない日本人。

少女の声とは違う、というかこんな野太い声が少女のものであつて

9

もちや……つてやつぱこわいから！

「不運だったな、人間」

「はい……？」

不運？　なにが？　喋るフクロウに会ったこと？　え、ひょっとして出会ったら命を取られる死神とかそういうのなのか？　実はラスボス？

そんな俺の考えを、フクロウ（推定）はあっさりぶち壊した。それも最悪の形で。

「今のおぬしに、自分の世界に戻る術はない」

もう本当、どれだけ笑われたっていいから、これは夢だと教えてください誰か。

に

客観的に見ても、自分は普通の人間だと思う。というか、そうだ。勉強でも運動でも、特別秀でたものがあるわけじゃない。いつもほどほど程度で、良くて普通よりちよつと上くらい。でもそれでも別に困りはしなかったし、完璧超人のクラスメイトを見てたまに落ち込んだりはしたけど、基本的には満足してた。一等の宝くじに当たるだとか、そんな強運を持つのは一握りの人間であって、俺には到底縁のない話だ。当選した最高額、3000円だし。そんな普通の人間が、マンホールから落ちて次に目が覚めたらそこは異次元、なんて。あちこちで使い古されたネタを、一体誰が信じてくれるっていうんだろう。

「え、あの、帰れない、って……」

頭が真っ白になる、っていうのを俺は初めて体験した。倒れなかっただけでも、自分を褒めてやりたいくらいだ。一体このフクロウ（推定）は何を、言っているんだろうか。

「ふん、理解出来ないのか。頭の悪い人間だな」

「いや、え……？ あの、ここって日本……というか地球じゃ、ないんですか」

どんな返答が返って来るのかは、俺だってある程度は予想してた。それでもわずかな期待を込めて、俺はフクロウ（推定）に尋ねる。ほんの少しの沈黙が、俺を追い詰める。ドキドキと心臓がうるさい手にかいた汗が気持ち悪い。聞きたい、けど聞きたくない。希望が打ち碎かれるのが、恐怖で仕方がなかった。

「違う、と言えは違うな。だが、おぬしの世界に限りなく近いと言えは近い」

それは想像したどの答えでもなく、期待も不安も曖昧なままになってしまった。まさに、宙ぶらりんな状態。縋っていいのか、ダメなのか。それさえもはつきりしない。

そもそも彼——声からして多分オスだろうというこれまた推測だ——の言う俺の世界ってなんだ？ 日本、アメリカ、イタリア、フランス、ドイツ……ぱつと頭に浮かぶのは有名な国々。それらは地球という枠に収まっているはずだ。地球＝世界だとして、違うけど近いつてどういう意味だ……？ と色々考えてはみたけど、だめだ、さっぱり訳がわからない。そもそも俺あんま頭良くないんだって。平凡代表なんだって！ ああ誰か翻訳してくれないかな。切実に望むよ。

「えーっと、あの、やっぱりここは地球ではない、と……？」

おそろおそろ、口にする。すると、間髪入れずに返事があった。

「違うぞ」

「え、あ……ありがとう」

てつきりフクロウ（推定）が答えてくれるものだと思ってたのに、答えてくれたのはずっと黙ってた女の子の方だった。あれ、実は結構親切なんだろうか。第一印象だけで恐ろしいなんて思ってしまったて申し訳なかったかも。でも違う、って……なんだ、結局異世界なんじゃないか。分かれれば怖くな……って余計怖いから。

全部夢だったなら、どんなに楽だろう。目を覚ますだけでこの世界から帰れるのなら、どれほどそうしたいだろう。うるさく鳴る携帯

のアラームを止めて、母さんが作ってくれた朝ごはんを食べて、途中で妹が起きてきてちよつと会話して、ついでに新聞のテレビ欄をチェックして、友達と学校へ行って……いつか夢を見たことさえ忘れて、そんな当たり前な日常をまた繰り返すんだ。

でも、これは夢じゃない。感じる胸の痛みも、ほっぺの痛みも、底知れぬ恐怖や絶望も、夢の一言で済ませられるはずがない。なかった事になんて、出来るはずもない。手を伸ばせばすぐそこにあったはずの何気ない日常が、急速に遠ざかっていく。まるでそっちが夢だったように霞んでいくなんて、信じたくない。ああどうして、本当にどうして。こんなことになった？

俺、これからどうなるんだろう。どうしたら、いいんだろう。言いようのない不安に襲われて、その場にしゃがみこんでしまう。気力だけで立ち続けるのもいい加減限界だった。

「そもそも何故、生きた人間がここに……。主、どうしましょうか」「知らぬ」

「はあ……まあ仕方ないですな。どうしようもない。という訳で人間、潔く諦めろ」

「へ！？ いや、無理ですよありえないでしょ！ 大体ここどこなんですか！ 帰れないって何で……！」

無理だから諦めろ、と言われて納得できるはずがない。そんな物分のいい人間がいるのなら俺は見てみたいよ！

ひとつ得た知識。

・女の子はフクロウ（もう面倒なので確定）の主。要するに女の子の方が偉いらしい。

・今知ったところで何の意味もない。

「ここは、裏だ」

「浦田さん……？」

隣の隣の隣の家が、浦田さんだった気がする。はて、それに何の意味が？　そうやって悩んでたら「阿呆か」と一蹴されてしまった。うう、厳しい。

「トランプに表と裏があるように、世界にもまた表と裏がある。二つは遠いように見えて近い。だが永遠に通じる事はない。そういう事だ」

「……俺のいた世界か、この世界のどっちかが裏だと……？」

「その通り。おぬしのいた世界を表とするなら、ここが裏に当たる。通常相容れる事はないが、二つの間には扉があるのだ。互いに行き来可能な扉が、な。おぬしはその扉を通して来てしまったんだろう。まあ、かなり特殊なケースだな」

フクロウさんは多分、ちゃんと説明してくれようとしているんだろうと思う。それなのになんだろう、このぶつとび加減。筋が通っているように見えて、言ってる内容めちゃくちゃです。

扉ってのがつまり、俺の世界にあったマンホールなんだろう。で、俺はそこに落ちてしまった。だから裏の世界であるこの場所に来てしまった。うん、漫画とかでよくある展開だ。でもあれは大抵何かしらの理由がある。勇者召還だったりとか、そういうのだ。……じやあ俺は？

「あの、特殊なケースってのは……」

「表でははぐれてしまう者が、ここに来るのだ。例えば死者だったりな。おぬしの世界に妖怪やらいただろう。あれは裏の世界の者が誤って扉を通ってしまったケースだ」

「妖怪ってそれ一体いつの話ですか……。さっきから気になってた

んですけど、その言い方だとまるでそれが正しくないことのように
すよね」

「実際、正しくないのだ。表から裏の世界へと来るのは正しい循環
だが、裏から表へ行くのは正しくない循環。そして表の生きた人間
が迷い込むのもまた、正しくない事。言い換えれば、決められたル
ール以外全て正しくなどない」

表では生きられなくなった人間が、裏へ来る。けどそれ以外のこと
で裏へ来るのはおかしい。そして、今回は俺がそのケース。……俺
は、間違った存在だってことらしい。

けどそれだと――

「相容れないはずなのに、二つの世界の線引き、曖昧すぎないです
か」

つまり俺の世界が地上で、ここが天界のようなものだと考えればい
いわけだ。だって死者もここに来るっていうし。で、表に行くのは
間違いらしいし。それなのに、話を聞く限りそれはどうも頻繁に起
こっているものらしい。なんで？

だからただ不思議に思って聞いただけだったのに、どうしてかその
場の空気が凍った。……え、もしかしてこれ、触れちゃいけない話
題だった？

「……おぬしに言われなくとも、分かっている」

すみません、やっぱり聞いちゃいけなかったみたいです。フクロウさ
んの声が更に低いです。とっても不機嫌みたいです。で、でもさ、
俺だって聞く権利はあると思うんだ……！　なんて言えるような空
気じゃない。ごめんなさい、マジで。

「正しく送られるべき者、誤って入り込んでしまった者を導く者がいる」

「えー？　じゃあ俺、帰れるんじゃない……！」

「それが出来るなら、おぬしに帰れないとは言わないだろうが。少しは頭を使え、若造め」

「す、すみません……」

俺、喋るフクロウに若造扱いされちゃったよ。もしかしてこれすごい貴重な体験？　いやそもそもこの世界にすることが特殊だって言うんだから、そこから貴重すぎる。でも、全然まったく何ひとつとして嬉しくない。それなら宝クジ当たりたいたいよ……

「それが可能なのは、それぞれの世界を管理する者のみ。おぬしがイメージしやすいように言い換えるなら、神というものだ。おぬしの目の前にいるこのお方の事だ」

「この方って、神って……　ええええええ！？」

「失礼な態度を取るなど言っておるだろうが！」

まってまって、待ってくれ。俺何回驚けばいいんだろうか。後何回驚いたら開放される？

神、ってあれだよな……信じる人は心から信じる、目に見えない偉大な存在。ついでに俺はいたら面白いよなーくらいの認識。だって俺の生活には何の関係もないし。周りの人だってそんなもんだったけど、目の前にいるこのきつれーな女の子が、神様だって言う。いやそれ何の冗談？　ってことは待てよ、そもそも俺たちの世界にも神様がいるってことで……えええ。

「あの、これ壮大なドッキリとかじゃないですよ……？」

「この期に及んでまだ言うのか？」

「……そうですね、ああああもつ、俺どうしたら……」

帰る術がない。帰れない。その事実が、頭の中でひたすらエンドレスする。平凡な人生だったけど、やりたいことはそれなりにあったし、こんなところで終わるなんて信じたくなかった。取り戻せなくなって、初めて実感する。当たり前の日常が、俺にとってどれだけ大事なものだっただのか。大切なものは失ったときに気付くって、本当なんだな。

……あれでも、フクロウさんが言ってることってなんか色々矛盾してないか？

「神様がいて、この女の子が神様。で、神様は別世界に送れる力を持つんですよね。じゃあなんで、出来ないって……？」

出来るっていたり、出来ないっていたり。結局、どっちなんだろうか。

……どうも、本日二度目の失言だったらしい。空気が怖い。沈黙が肌に突き刺さってかなり痛い。頼むから、何か喋ってくれ。ほんと頼むから。

「……主は今、その力を失っておるのだ」

「は！？」

いや確かに頼んだけど！　けどそういうのはいらない！

「正確には半減しておる、だがな。よっておぬしのような大物は帰せない」

「じゃあ俺ってやつぱり……」

「最初に説明しただろう、いい加減諦めたらどうだ」

ああ、視界が暗く暗くなっていく。お母さん、お父さん、妹、友達、

クラスメイト、先生、ご近所の皆さん、浦田さん……挙げればキリがない、自分がお世話になってきた沢山の人たち、ごめんなさい。どんなに想ってもどんなに願っても届かないけど、どうかお元気で母さん、母さんの料理好きだった。さじ加減がびっくりするほど適当で、よく味が濃かったり薄かったりしたけど、母さんの料理大好きだった。弁当も毎日作ってくれてありがとう。生んでくれてありがとう。

父さん、いつも母さんの尻に敷かれてた父さん。でも本当はかつこよくて、立派な人なんだってちゃんと知ってる。俺たちを養うために毎日働いてくれてありがとう。

些細なことで喧嘩ばかりした妹、俺はいい兄貴でいれたかな。本質的には仲のいい兄妹だったって、そう信じててもいいよな？ お前もそう思ってくれてたの、知ってる。すごい、嬉しかった。

ありがとうだとか、ごめんとか、大好きだとか。伝えきれてないことが山ほどある。まさかこんな風に別れる日が来るなんて、想像もしてなかった。どうして俺、もっと素直になれなかったんだろう。

ずっとこらえていた涙が、止め処なく溢れてくる。ぽたりぽたりと畳を濡らしたけど、そんなことに構っていられない。俺、本当に帰れないのかな。帰りたい、皆がいるあの場所に帰りたい。未練が、ありすぎるんだ――

「……人間というものは、本当に面倒だな」
「いまくらい、泣かせてください……」

優しくしてくれなくなたっていい。慰めてくれなくなたっていい。だからせめて、許して欲しい。

「希望が、全くないわけではないぞ」
「え!？」

その言葉を聞いて、俺は勢いよく顔をあげる。きつと涙でぐちゃぐちゃでひどい顔になってただろうけど、そんな些細なことは気にも留めなかった。

フクロウさんは俺の目線に合わせてくれて、背後にはキラキラした神々しいオーラが見える。気のせいっていうのが気のせいなんだよ！ これぞまさに救世主！ さっきは怖いなんて思ってたごめんな…

…！

でもそんな彼が口にしたのは、相変わらず期待していいのかダメなのかよく分からない内容だった。

「主の感情さえ取り戻せれば、おぬしは帰れるかもしれない」

宝くじの一等に当たるなんて、ほんの一握りの人のできごと。きつとそれよりも遥かに珍しい体験をしている俺は、果たして運が良いのか悪いのか。

分かったこと。

- ・ 女の子はフクロウの主。
- ・ ここは裏の世界。俺が迷い込んだのは特殊なケース。
- ・ 神様である女の子は力が半減しているため、俺を送ることが出来ない。
- ・ 解決策は女の子の感情を取り戻すこと。

結論。

- ・ …… 希望が、見えません。

さん

マンホールから落ちたらそこは異世界でした。帰るためには神様である女の子の感情を取り戻す必要があるらしいです。……ああ、誰か夢だと言ってくれないかなあ。もしくはドッキリ！ の札を出してくれてもいい。大丈夫、今なら絶対に怒らないから。泣いて喜ぶから。

何でも、昔感情が失われてしまった時に力も失くしてしまっただけ。だから感情を取り戻せたらもしかしたら力も……という話らしく。なんだその無茶ぶり！ と思わず突っ込みそうになった。というか突っ込んだ。「なら素直に諦めろ」と返されてへこんだ。フクロウさん容赦なさすぎる。

そんな彼がわずかな可能性を希望として提示してくる辺り、本当に他の方法はないんだろう。けど、一人の女の子の感情を取り戻す——なんて、容易であるはずがない。きっと本来なら何度もカウンセリングとか受けて、少しずつ改善していくべき問題なんだから、それだけ複雑な事情を、平凡代表の俺にどうしろっていいのか。しかも「もしかしたら」という曖昧なオマケつきで。

「諦めればいい」 喋る梟は、再度俺に言う。それが一番楽なのだと、どうしようもない事だとして受け入れてしまえばいいと。……でもそれが出来るなら、泣いたりしない。こんなふざけた話に縋ろうとしたりはしない。可能性がゼロじゃないなら、足掻いてみせようじゃないか。ただ純粹に、この女の子と話をしてみたかったのも、理由の内だったかもしれないけど。

「とりあえず、腹へった……」

よくよく考えてみれば、夕飯前にここに来てしまつてそれから歩き回ったんだから、そりやお腹もすくよな……。そういえばこつて食生活どうなつてんだろ。木の実とかはあつたけど、色がなくてちつとも美味しそうには見えなかつたんだよなあ。

あ、とふと思い出し、ずつと持つてた鞆を漁る。入ってるのは教科書とか、電子辞書とか、まあ一般的なもの。それなりに重いから置いてきてしまえばよかったんだろうけど、俺は絶対に手放さなかつた。手放せなかつた。俺を証明する唯一のもののように感じたからでもこうなるつて知つてたらもつと色々持つてきたんだけどな。いや、分かつてたら来てないつていう突っ込みはなしの方向で。

ついでに、電子辞書の画面もやつぱり真っ暗だった。うーん、世界の違いのせいなんだろうか。ファンタジー。そんなことを考えながらしばらくしてお目当てのものを見つけ出し、手に取る。

「君……えーと、そういえば君たちの名前は？」

お菓子の袋をがさがさと開けつつ、気になったことを尋ねてみる。そう、今までのやり取りを思い起こしてみれば名乗ったのは俺だけだった。二人（正確には一柱と一匹）とも自己紹介をしてくれなかつたから歳はおろか名前さえわからない。だから教えて欲しい。そんな俺の発想は、別に間違っちゃいないはずだ。

「……えつと、名前？」

なのに無言なのは、何でなんだろうなあ。俺つてひよつとして空気読めない……？

「ない」

落ち込んでたら、ようやく女の子が返事をくれた。

「ないさん？ 面白い名前だねー……って無いの!？」

名前ないって、今までなんて呼ばれてたんだろうか……。女の子は
ずつと淡々としてて、全くぶれない。ぶれなすぎてちょっと怖い。
表情にも声にも温かみがないし、なんとか機械的だ。もしかし
なくても常にこのテンションなんだろうか。

「主は主。わしはフクロウ。それだけだ」

「え、フクロウさんの名前フクロウなんだ……」

なんとという直球ストレート。せめてもうちょいどうにかしようよ。

「好きに呼べばいい」

「好きに呼べ、って言われても……うーん」

まさか、ないさんと呼ぶわけにもいくまい。となるとここは、あだ
名とかつけるべきなんだろうか。いやそもそもあだ名つてのは本名
からもじるものなんだから、ちゃんと名前決めてあげるべきなのか
も。でも名前つけるなんてペット飼った時以来なんだけど……そう
いえば死者はここに来るって話だったから、あの子も来たのかな。
子供ながらに一生懸命世話をした。そうしたら、愛情で返してくれ
た。優しさだけで包まれていた、あの頃。でもその命は儚くも消え
てしまった。悲しくて悲しくて仕方がなかったのを今でもよく覚え
てる。

って今は名前だよな、名前。何か手がかりはないかと、俺はきよろ
きよろと辺りを見渡す。なんか、物がほとんどないんだなあ。タン
スとか、鏡とか、必要最低限ものしかないっぽい。何に使うのかよ
くわからないものとかも壁に立てかけてあったりするけど。テレビ
がないのは現代っ子には辛いです。あ。

「紫苑！」

「シオン……？」

「名前って、大切なものだと思うんだ。君の瞳が紫苑色だったから、紫苑。……だめかな」

そしてまた訪れる、沈黙。しまった、やっぱり安易すぎたんだろうか。結構いいと思ったんだけどなあ。後はえーと、菫とか菖蒲とか……小さい頃妹に聞かされた知識を引きずり出す。何でか、出てくる名前は全部花の名前だった。

「かまわぬ」

「へ？」

それってかまわないって意味？　つまりいいよ、ってことなんだろうか？

「主がそう言っておるのだ、何を聞き返す必要がある！」

「えっと、じゃあ、紫苑。お菓子食べる？」

そうだよ、本当はそれが聞きたかったただけなんだよ。袋をあけたスナック菓子を、二人の方に向ける。でもフクロウさんって人間のもの食べるんだろうか。

「……お菓子？」

「あ、もしかしてこういうの食べたことない？　これコンビニ限定の新品でさー。って別にそんなことはどうでもいいか。はい、お一つどうぞ」

彼女の白くて華奢な手に一つ、スナック菓子を乗せる。彼女は相変

わらず無表情のまま、でも興味深そうにじっと見つめていた。なんだ、普通の女の子じゃないか。（いやあんま普通ではないんだけど）さっきまでずっと緊張しっぱなしだったけど、ようやく力が抜けていく。

「ん、うまい。あー……癒される……」

正直ほとんど理解できてない、不思議な世界。それでも変わらない菓子の味に安堵しながら噛み締めるように食べた、そんな一日目。ついでに紫苑は、俺が食べたことで危険なものではない判断したのか、ぱくつと勢いよく口に放り込んで無言で噛んで無言で飲み込んでいた。……今回は無反応だったけど、まあこれから頑張ろうとおもう。

＊＊

そしてそれからほんの少しだけ、月日が流れて。

紫苑はあんま喋らなくて、大体はフクロウ（さん付けてたらいらないうって言われたから呼び捨て）から聞いた話だけど、なんとなくこの世界の仕組みについて分かってきた。本当になんとなく。

なんでもこの世界は「管理する者の想像世界」が基準なんだそうだよ。ようするに、紫苑の心の中がそのまま世界として形になってるらしい。それを聞いて初めて、モノクロ調なのに納得した。後、りんごと思われるものが四角かったりさくらんぼらしきものの実が片方だけだったりしたのも納得。紫苑、色々と無知なんだもんなあ。……そんなんだから、味なんてほとんどない。腹が膨れるだけマシ、レベルだ。けど俺があげたスナック菓子が紫苑の記憶に残ったのか、ほのかにその味がする時もある。見た目りんごもどき、味は安いスナック菓子。カオスだけどこの際文句は言えない。あー、ラーメン

食いたい、マツク行きたい、とにかく味が濃いもんが欲しい……。

「俺の勝ち、だね。えーっと、12勝4敗か」

ゲームが終わって山になっているトランプを集め、リズムよくシャッフルする。

紫苑もフクロウも、普段はこの神社ですっと過ごしてるんだそうだが何してるの？ と聞いたら何もしてない、って返ってきてびっくりしたものだった。そんなわけで特にすることもないので、トランプ、あやとり、花札、編み物…… などなどを紫苑に説明して遊ぶことにした俺だった。一部変なのは妹に教わったやつだけど、まさかこんな場所で役に立つとは。

「紫苑、次は何がいい？」

「何でもいいぞ」

「うーん、何にするかな」

感情が失われているという彼女は笑うどころか一切表情を変えたりはしなくて、当初は怖いと思ったものだけど、今は大分慣れてきた。彼女に悪気はないわけだし。ポーカールとかダウトとか、そういう心理戦は全然考えが読めなくて完敗する羽目になったけど。

「でもその前に水、汲んでこようかな。喉渴いてきた」

「待て、わしも行く」

「おっけ。じゃあ紫苑、少し待ってて」

「うむ」

立ち上がり、やっぱり勝手に開くふすま（今更だけどどういう原理なんだろうか）を通して外へと出て行く。目指すのは歩いてちよつと行ったところにある小さな川。俺の前には案内役でもあるフクロ

ウ。あんなに驚いた喋るフクロウも、今ではすっかり慣れてしまった。慣れって怖い。

「あのさ、そういえば聞きたかったことがあるんだけど」

どろどろとした土を踏みしめながら、フクロウに話しかける。歩きやすいスニーカー履いててよかったよ、ホント。まさか森を歩き回ることになるとは。探検もしてみたかったけど、凶暴な生き物もいると聞いてその考えは即座に捨てた。安全なのはこの周辺だけらしい。改めてみると、俺って実は運よかったんだな……。だから俺も神社で生活してる。だって外、こわいし。

「なんだ、まだ何か聞き足りないのか」

「いや、全然足りないから……」

フクロウの声には間違いなく棘があった。いやまあ、質問攻めしてしまった自覚はあるけどさあ。

「一応聞いてやろう。言ってみろ、人間」

「ありがと。でも俺、ちゃんと名乗ったはずなんだけどなあ……」

考えてみれば、フクロウにも紫苑にも名前を呼ばれた覚えがない。人間って……一個人として認識されてるのかも怪しい呼び方だ。そのうちに目的地に辿り着き、俺は使い古された桶で水を汲む。

綺麗なのかそうじゃないのか、イマイチはつきりしない水。けどごみなんてどこにも見つからない川は、色さえあればいつかテレビで見たような美しい光景なんだろうと思う。なんか変な生き物が泳いでたりするけどさ。それはスルーしておく。

「ね、フクロウ。俺がここにいるのって特殊なケースって言ってた

じゃん」

「うむ」

「俺の前にもそんな風に迷い込んだ人っていたのかな、って」

ずっと疑問に思ってたことのひとつだった。かなり特殊、とは言ってもなんか前にもあったみたいない方だったから、ほんの軽い気持ちで尋ねたつもりだったんだけど、何故かフクロウは黙り込んでしまった。

「……フクロウ？」

「いるぞ」

「そっか、やっぱりいるんだ！ その子ってどうなった？」

「おぬしが必要はない」

「いや、結構あると思うんだけど！ って、ちょ、先に帰るなよ！」

な、なんだろう……ひょっとして俺、聞いちゃいけない話題にふれた？ また？ なんか不機嫌というより、切なさが紛れた声音だった気がするのは俺の勘違いなんだろうか。

でもそっか、やっぱりいるんだ。その子はどうなったんだろう。無事帰れたのか、それとも叶わなかったのか。フクロウが答えてくれなかったのは、もしか俺に気を遣って……？ ま、まさかな。

「紫苑、ただいまー。あれ、どうかした？」

いつもは部屋の中から出ない紫苑が、どうしてか外にいる。何をするでもなく、ぽつんと突っ立ってて。

不思議に思っただけの視線の先を追う。……ああ、ここにも命の終わりって、あるんだ。

「他の動物に襲われたのかな。お墓、作ってあげようか」

「……墓？」

「遺骸や遺骨を葬るところ……って言っても難しいよな、俺は、亡くなってしまった者へ居場所を作るためだと思ってるよ」

桶を置いて、息絶えてしまってる小鳥をそつと手のひらに乗せる。
……つめたい。この子はいつからここにいたんだろう。紫苑やフクロウに出会ってなかったら、俺もこうなっていたのかもしれない。
そう思うと、とても他人事には思えなかった。

「おぬしの言う事は、よく分からぬ」

「そつか。無理にとは言わないから、よかつたら手伝って欲しいな」

人の形をしてるのは神のみで、フクロウが喋れるのは神の力を分け与えてもらってるから、らしい。言葉が通じるのは紫苑とフクロウだけ。人の形をしてるのは紫苑と俺だけ。でも俺と紫苑は違う。フクロウはもっと違う。この子も、ちがう。皆それぞれひとりぼっちだ。

だからこそせめて、最期くらいは。

木の棒で十字架を作った簡素な墓に小鳥を埋めて、手を合わせる。
ここで亡くなったら、どこへいくんだろう。それこそ無へと還っていくんだろうか。俺には想像もつかなかった。

「大分冷えてきたね。そろそろ中に入ろう、紫苑」

「……胸が、」

「紫苑？」

ぽつり、と呟いた紫苑は、左胸を押さえて眉間に皺を寄せている。
こんな姿を見るのは初めてだった。

「前にも、こんなことがあったのじゃ。胸にぽっかりと穴があいたような、そんなものが」

「それって、寂しいんじゃないかな」

「寂しい？」

「そう。寂しかったり、やりきれなかったり、死っていうのは、悲しいものだから」

「これが、悲しい……」

この時の紫苑は、泣くのを必死に堪えている子供のようにも見えた。ひたすら彷徨い続けている、迷子の子供のように。

ここで亡くなったらどこへ行くのか、神である彼女に尋ねれば答えを得られたのかもしれない。けどその質問は相応しくない気がして、俺はどうしても聞けなかった。

「戻ろうか、紫苑」

いつまでも動こうとしない彼女に、手を差し伸べる。ゆっくりと時間をかけて、彼女は俺の手を取ってくれた。

つかみどころのない、色のない世界。それでも優しさとか切なさはもちろんあって、俺もこの世界で確かに生きてる。

この日を境に、少しずつ、少しずつ、世界に色がつくようになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2502z/>

Aster

2011年12月10日10時58分発行